用水路 たどった先には

いま 子どもたちは No.404

森の学校 2

宮崎県立五ケ瀬中等教育学校5年（高校2年）の沼勁太朗君(17)は昨年8月、同級生5人と一緒に自転車で険しい山道を走っていた。

学校周辺に張り巡らされた用水路（全長24キロ）をたどる。

ざっと2千枚の田を潤す用水路は1927（昭和2）年に完成した。ヒエやアワしか食べられず、飢えに苦しんだ集落の生活を一変させたという。

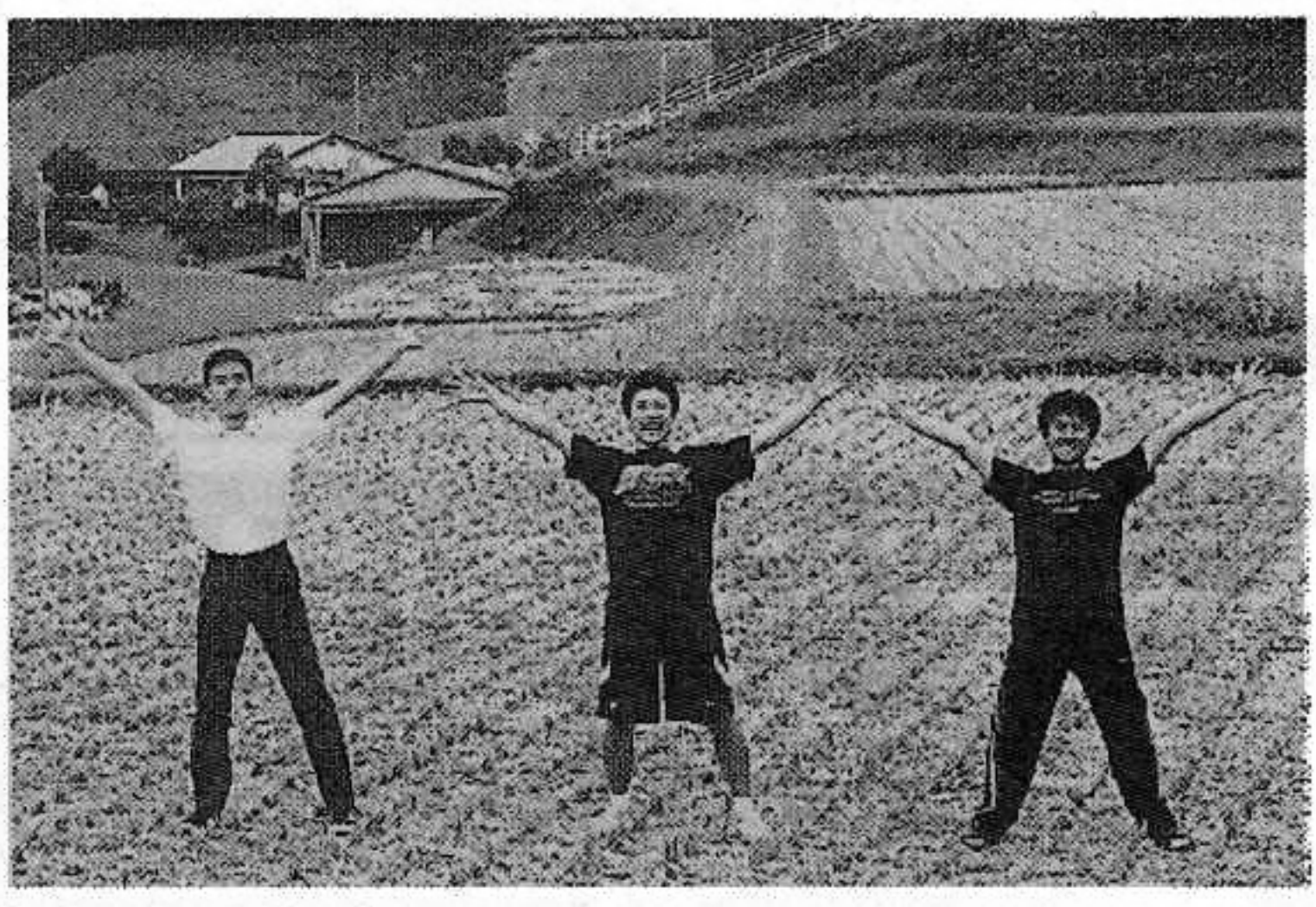
沼君の学級は2週間後の文化祭で、この用水路について展示発表することになっていた。当時の担任教諭に勧められたのがきっかけだった。役場で資料を調べ、用水路の管理人から話を聞き、現地に足を運んだ。

「自分の足でたどらなければ当時の人の心は分からない」

用水路の一部は、大気圧を利用したサイホンの原理を使い、山から谷を抜け、隣の山へ水を引き上げている。建設当時にはだったという。画期的な仕組みの構造を見ることができる場所を探した。沼君たちは、そ

「何しちょっとね」

棚田へ続く細い坂道を必死に上っていたとき、農作業中のおじさんに声をかけられた。



用水路の恩恵を受ける棚田に立つ沼勁太朗君（右）ら＝宮崎県五ケ瀬町

「サイホンの原理を使った用水路の場所を探しています。ご存じですか」

「よっしゃ。連れてっちゃる」

おじさんは軽トラックの荷台にみんなを乗せ、坂道を上り、「サイホン」の終着点に運んでくれた。そこには、見渡す限りの棚田が広がっていた。

「こげんな山の上で棚田が造れるのは、用水路のおかげよ」

絶妙に造られた棚田の風景を眺めていると、その恩恵が実感できた。沼君は思った。

「用水路のことを知らなければ、棚田に気をとめることもなかった。『学ぶ』ってこういうことなんだ」

宮崎県南部の三股町出身。用水路の探索をきっかけに、五ケ瀬町内のあちこちへ出かけるようになった。棚田を案内してくれたおじさんの自宅にも遊びに行った。「外に出れば自分の世界も、人との出会いも広がる。五ケ瀬から何も吸収しないのはもったいないですから」

（斉藤純江）